

photopos 35

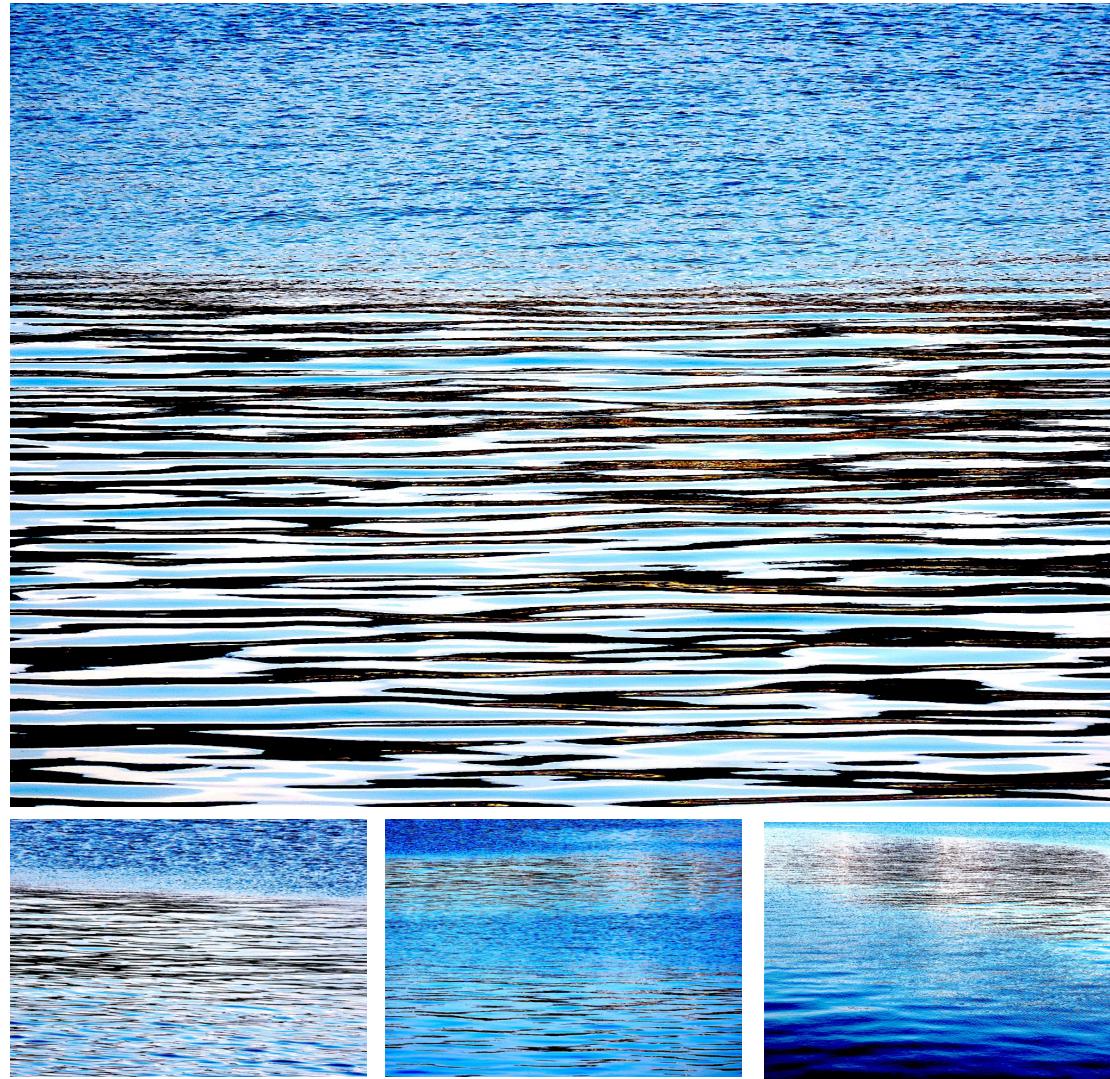
2016.1.4 ~ 2016.1.28

【神秘学ポエジー～風遊戯 第70集】

photo ヴァージョン

photopos851-875

神秘学遊戯団



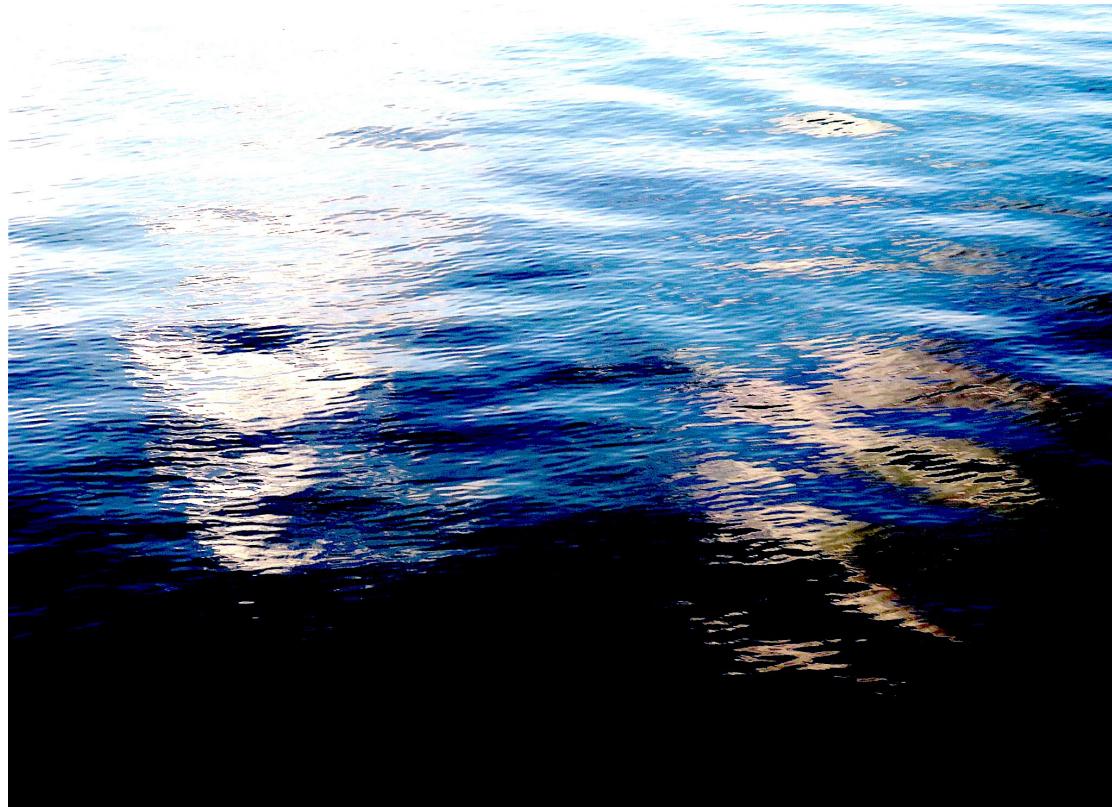
*広島県瀬戸田町にて

昨日の色
今日の色

心の色は
紡がれ織られ
明日の衣に

夢の時
現の時

心の時は
紡がれ織られ
明日の標に



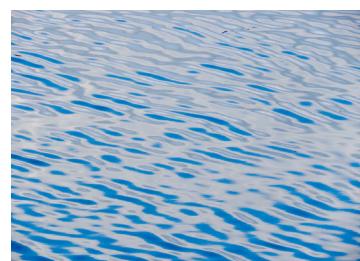
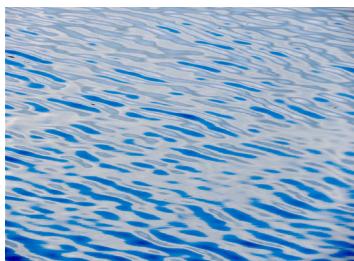
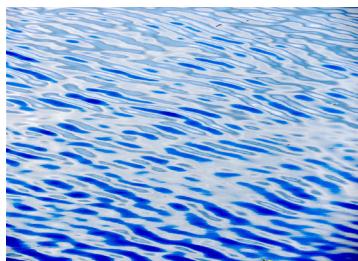
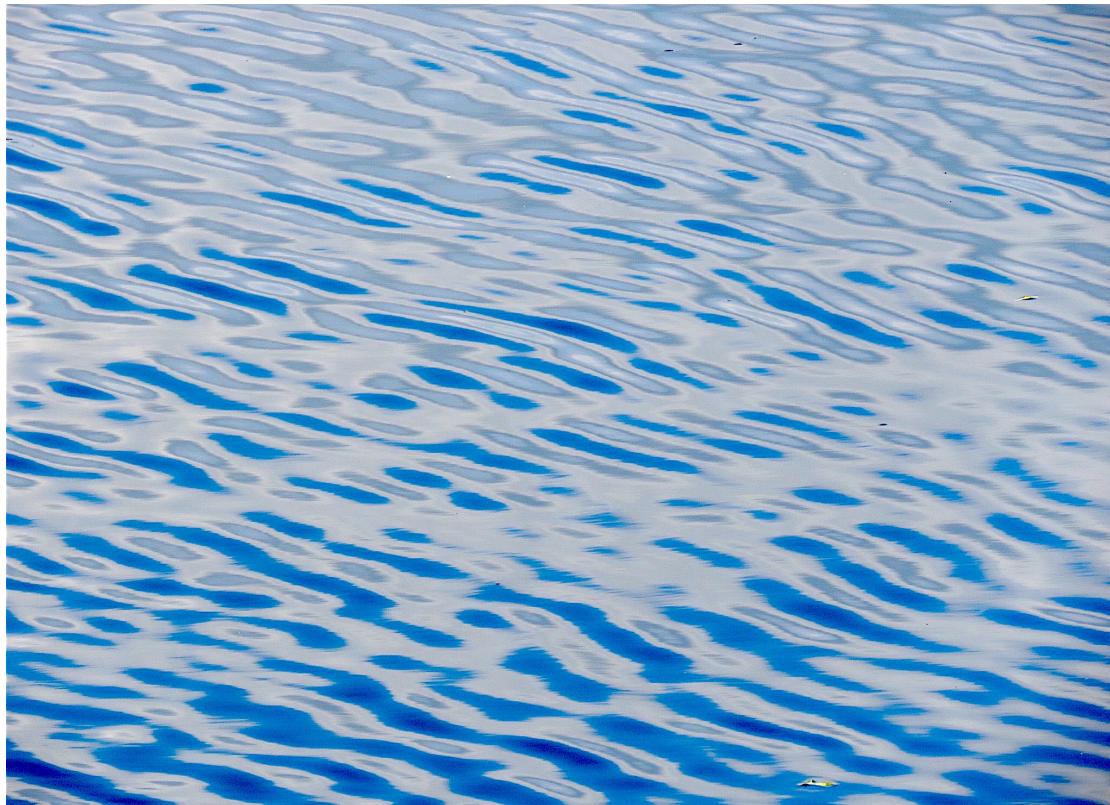
*広島県瀬戸田町にて

わたつみの
光と風に吹かれゆく
さざめく波の伝えごと

往くものは
やがて還るだろう
汝らもまた
往きて還るか

いにしえに
詠と語りで記された
秘密の文の伝えごと

失われしものは
新たに甦るだろう
汝らもまた
新たに甦るか



*高知県南国市十一・石土池にて

悲しきときは
悲しきままに

水面のうたかた
うつろうごとく

時のまにまに
ただようごとく

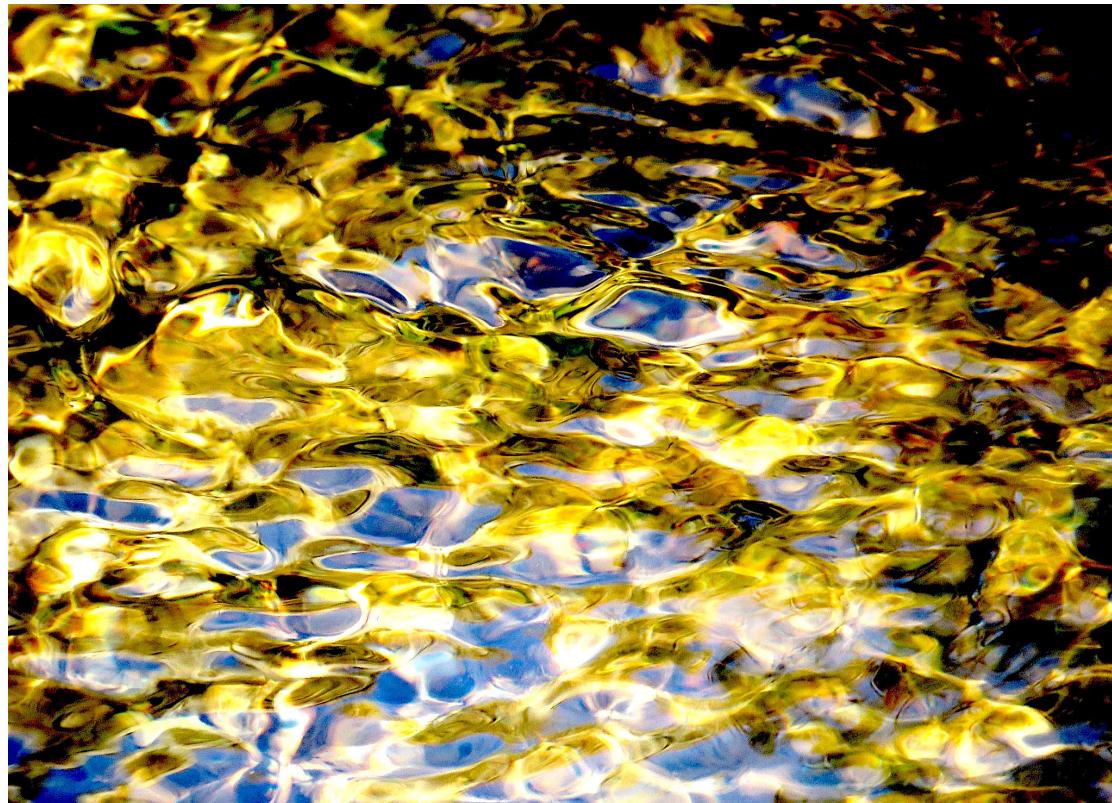
鏡のなかを
さまようごとく

凍った夢の
解けるまで

閉じた薔の
ひらくまで

さやけき光
浮かぶまで

悲しきときは
流れるままに



*高知県日高村・めだか池にて

心のどこかにしまったままの
光の種を見つけましょう
光の種を見つけたら
夢の庭を探しましょう

夢の庭を見つけたら
光の種を植えましょう
光の種を植えたなら
影のふとんを被せましょう

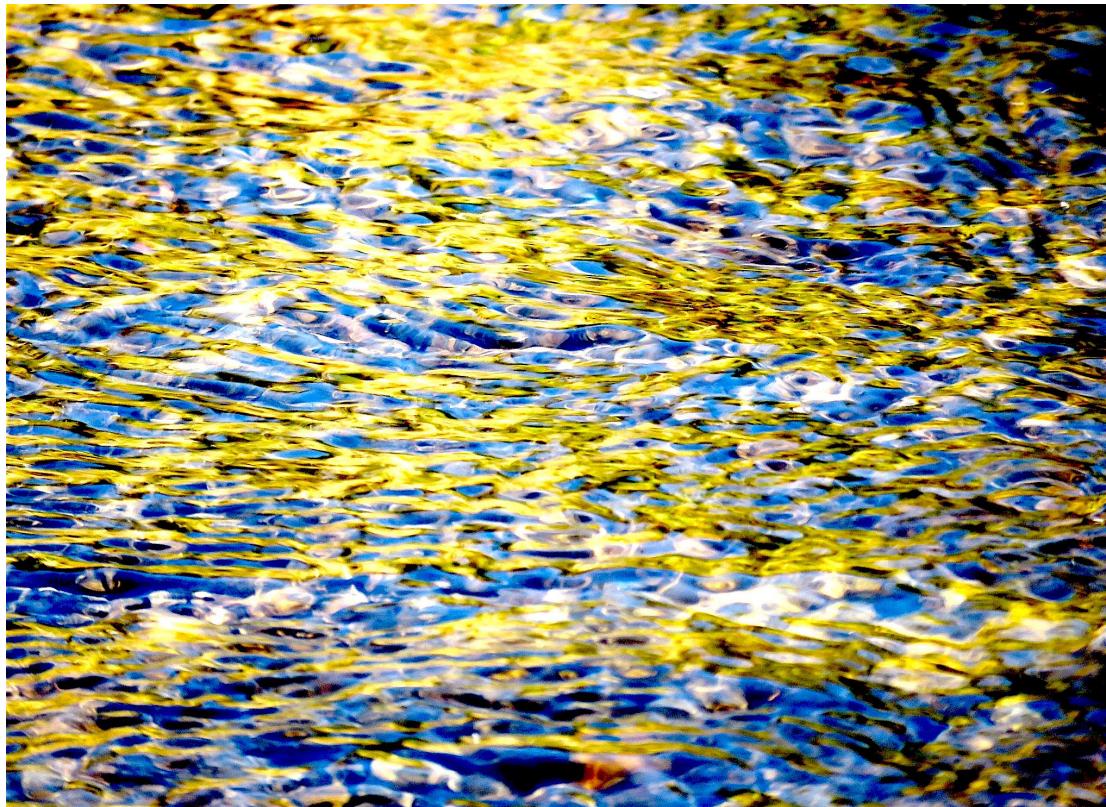
影のふとんは光の子ども
種をじっくり寝かせましょう
そして上からたっぷりと
觀智の水をかけましょう

やがて芽が出て茎も伸び
天へと枝は伸びてゆく
ときには雨も降るでしょう
ときには風も吹くでしょう

そして季節は過ぎてゆき
光の花は咲くでしょう
虫や鳥やに囲まれて
光の果実は実るでしょう

光の果実はおしげなく
天と地とを照らすでしょう
けれどもやがて時は過ぎ
なくしてしまうときも来る

心に光をなくしたときは
光の種を探してごらん
光の種を見つけたら
忘れた夢も探してごらん



どきどき
ヒカリ

はじめて
生まれた
心のように

どきどき
ウレシ

はじめて
出合った
手と手のように

どきどき
キラリ

はじめて
見つけた
色のように

どきどき
・・・

はじめて
愛した
人のように



*高知県日高村・めだか池にて



光陰流水の如し
喜怒哀楽千変万化
人の修羅
絶えることなし

久遠を求め
大地を衣とし
巖となりて
時を経る

されど人の時は
生と死のつかのまの光
久遠を求めつつ
刹那の舞

光陰流水の如し
生老病死走馬燈
ならば遊べ
時の深みへ

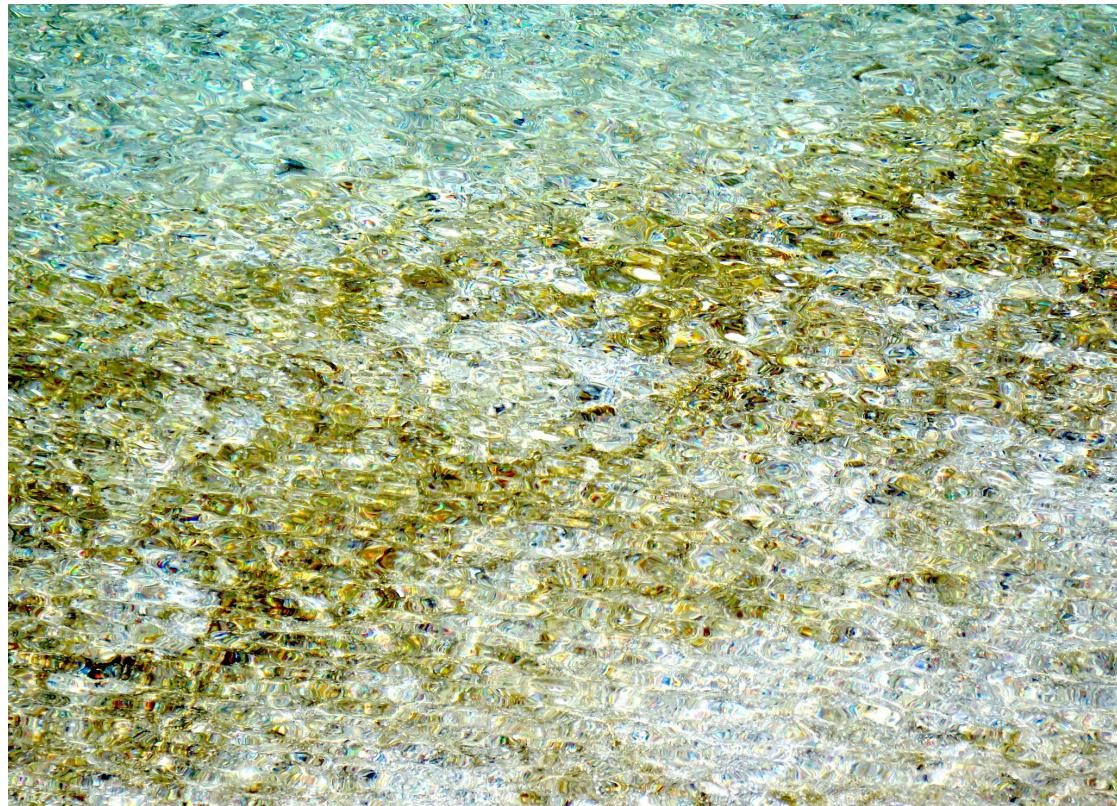


*高知県南国市・物部川河口にて

心の閉じた日には
見えない
聞こえない
色と音の訪れる場所で
静かに過ごす

言葉は教えすぎるから
意味に囚われすぎるから
思考はまるで機械だから
感情もまるでゴミ箱だから

記憶のガラクタや
やっかいな妄想からは
自由になれやしないだろうけど
見えないから見えるもの
聞こえないから聞こえるものを
じっと待ってみるのだ



*高知県いの町・仁淀川上流にて

むさぼるように
世の宝物を求めるることは
いらないのです
宝物はもうみんな
たくさんもっているのですから
魂の目と耳で
それを受けとるだけでいい
魂を閉じていると
受けとることはできないのです

手をあわせて
天に祈ることは
いらないのです
祈りはみんな
叶えられているのですから
両手をひろげて
光を受けとるだけでいい
手をあわせていると
受けとることはできないのです

むづかしい顔をして
考るすぎることは
いらないのです
考はみんな
訪れてくるのですから
両手をひろげて
それを受けとるだけでいい
考ることを尽くしたら
からっぽになっているだけでいいのです

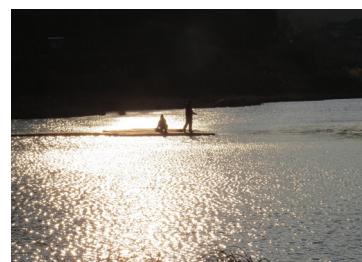
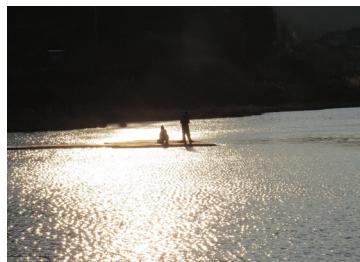


魂よ
獲物はあるか

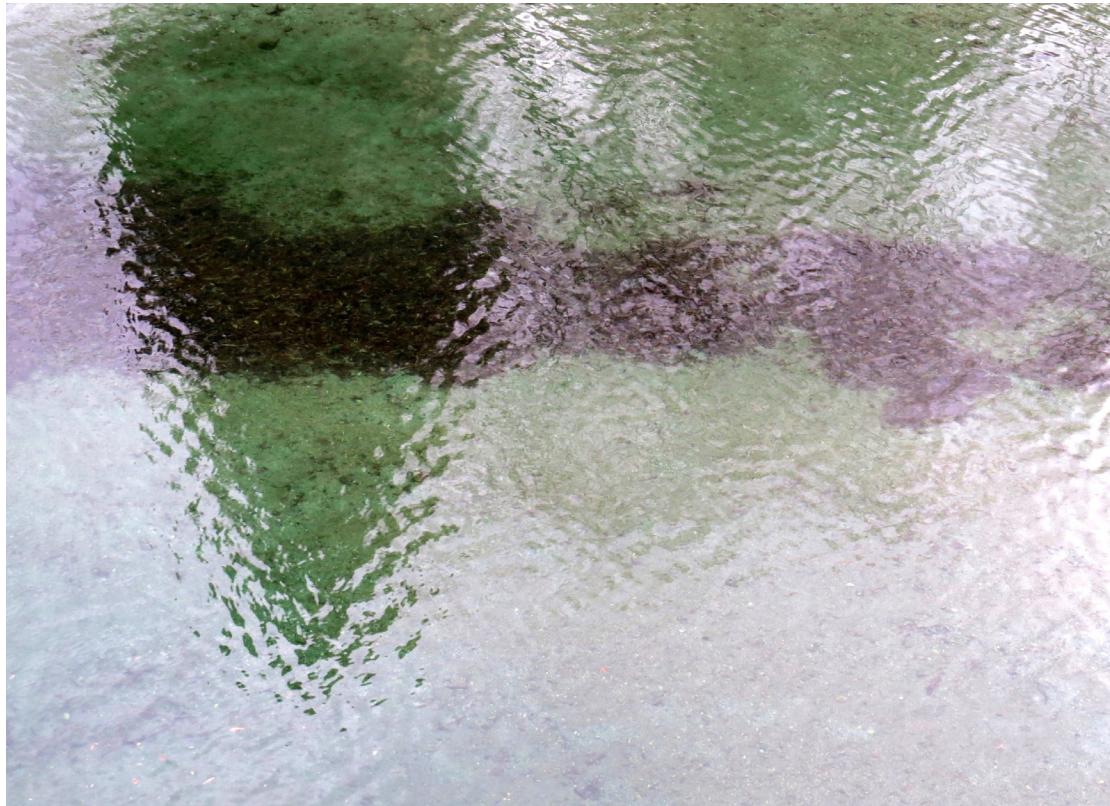
光のうちに
みずからを漁れ

魂よ
永遠の友はあるか

ひとり歩むときこそ
友はいつも寄り添う



*高知県日高村・めだか池にて



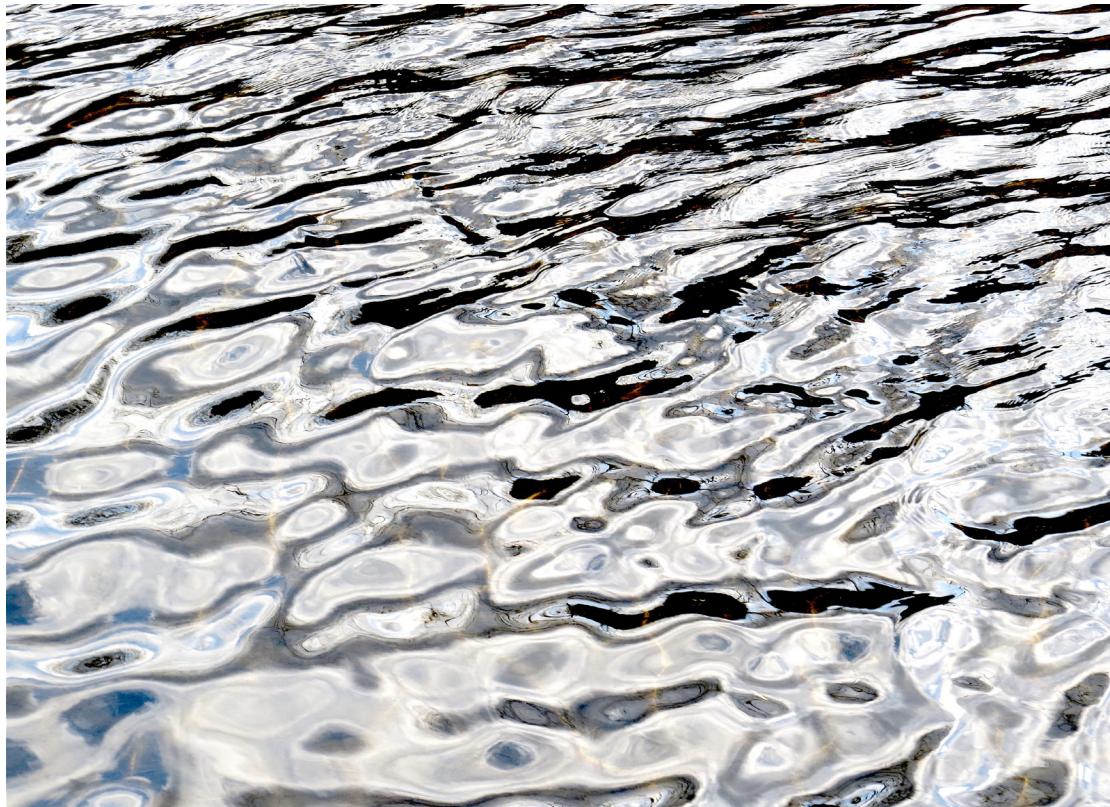
*高知県仁淀川町池川にて

天使はいつも
ここにいる
悲しいときは
そばにいて
わたしの涙と
ともにある

天使はいつも
ここにいる
独りのときは
そばにいて
わたしの心を
きいている

天使はいつも
ここにいる
死んだときは
そばにいて
わたしの体を
ときはなつ

天使はいつも
ここにいる
生れるときは
そばにいて
わたしの時を
とじこめる

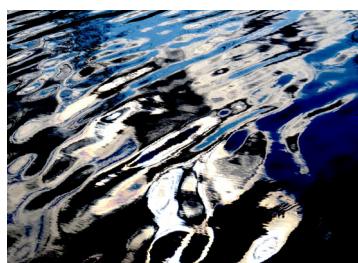
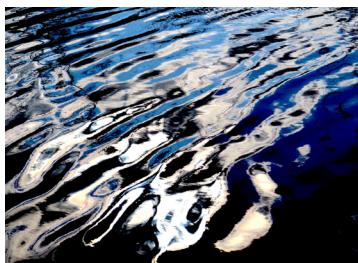
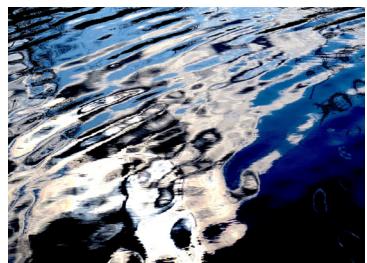
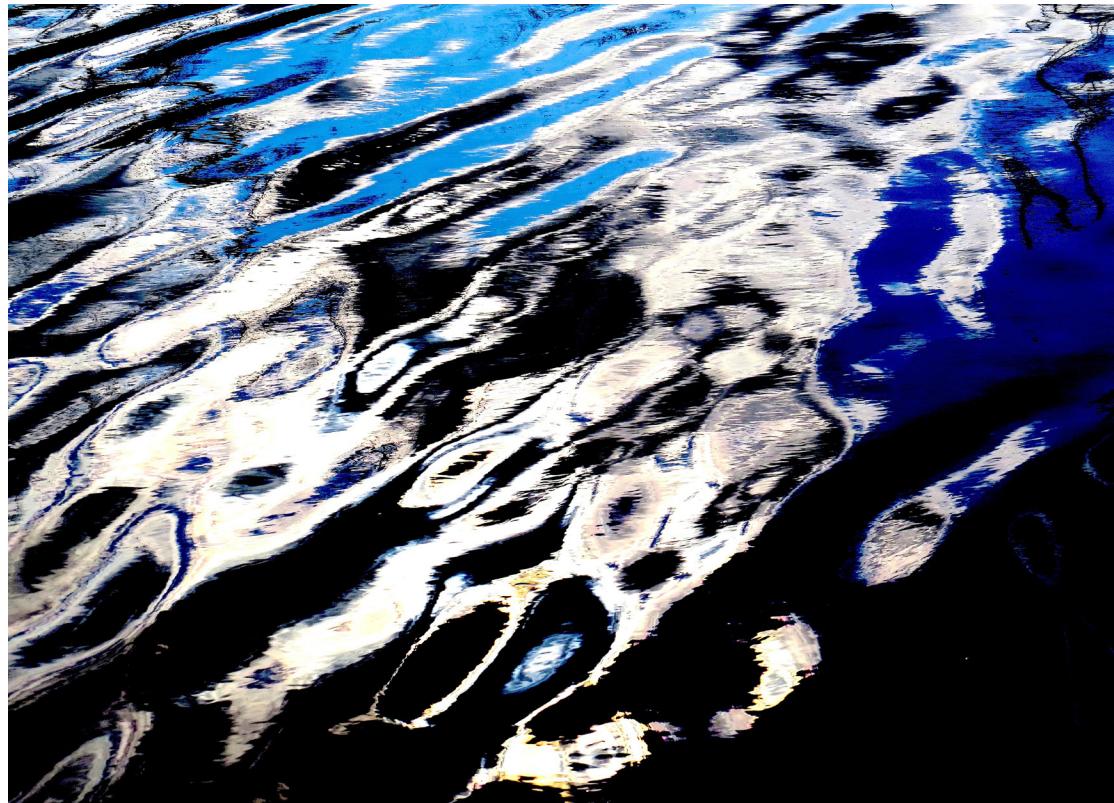


変わらぬものを求め
白き心でさまよい流れるも
変わらぬものは
変われぬわが心ばかり

ほんとうの言葉を求め
雲のごとくめぐりゆくも
言葉の光を遮りながら
むなしく漂うばかり

いのちの秘密を求め
生と死を超えようとするも
永遠はいまだ見つからぬまま
時は徒に過ぎゆくばかり

*高知県日高村・めだか池にて



*高知県日高村・めだか池にて

意味なんかないのさ
空が青いのも
水が流れるのも
意味なんかに縛られたくはない

考えなんかないのさ
前のことも
先のことも
考えなんかに縛られたくはない

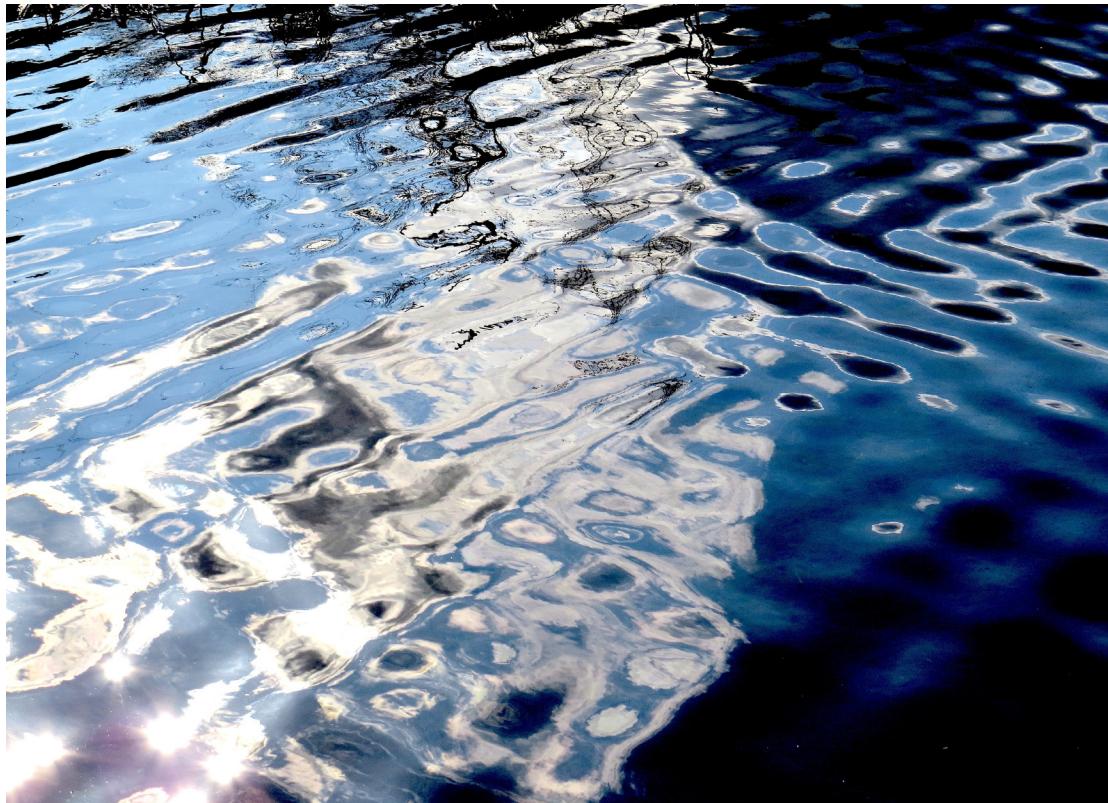
ぱっぱらぱあ
ぼくはからっぽの
らっぽになって
ぱっぱらぱあ

悲しくなんかないのさ
いまここにいることも
ぼくがぼくであることも
悲しみになんか縛られたくはない

秘密なんかないのさ
天使の祈りも
悪魔のさやきも
世界の秘密になんか縛られたくはない

ぼくはどうしてここにいるんだろう
ぼくはどうしてぼくなんだろ

ぱっぱらぱあ
ぼくはからっぽの
らっぽになって
ぱっぱらぱあ
ぱっぱらぱあ

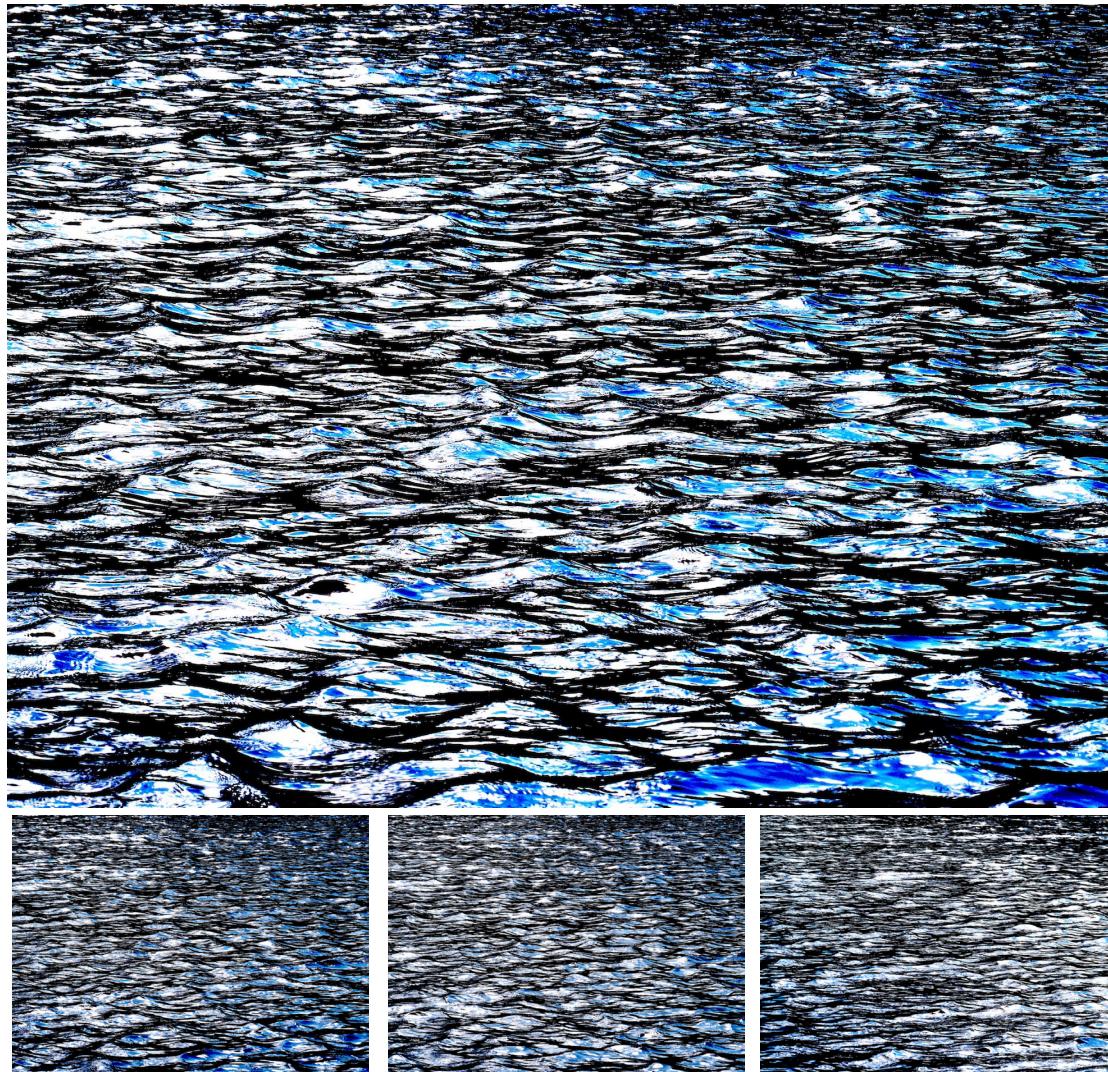


私という幻が
見ているのか
それとも幻が
私を見ているのか

あてなく
うつろい
さまよい
めぐりて

時という秘密の
やがて開かれるまで
私という秘密の
やがて開かれるまで

*高知県日高村・めだか池にて

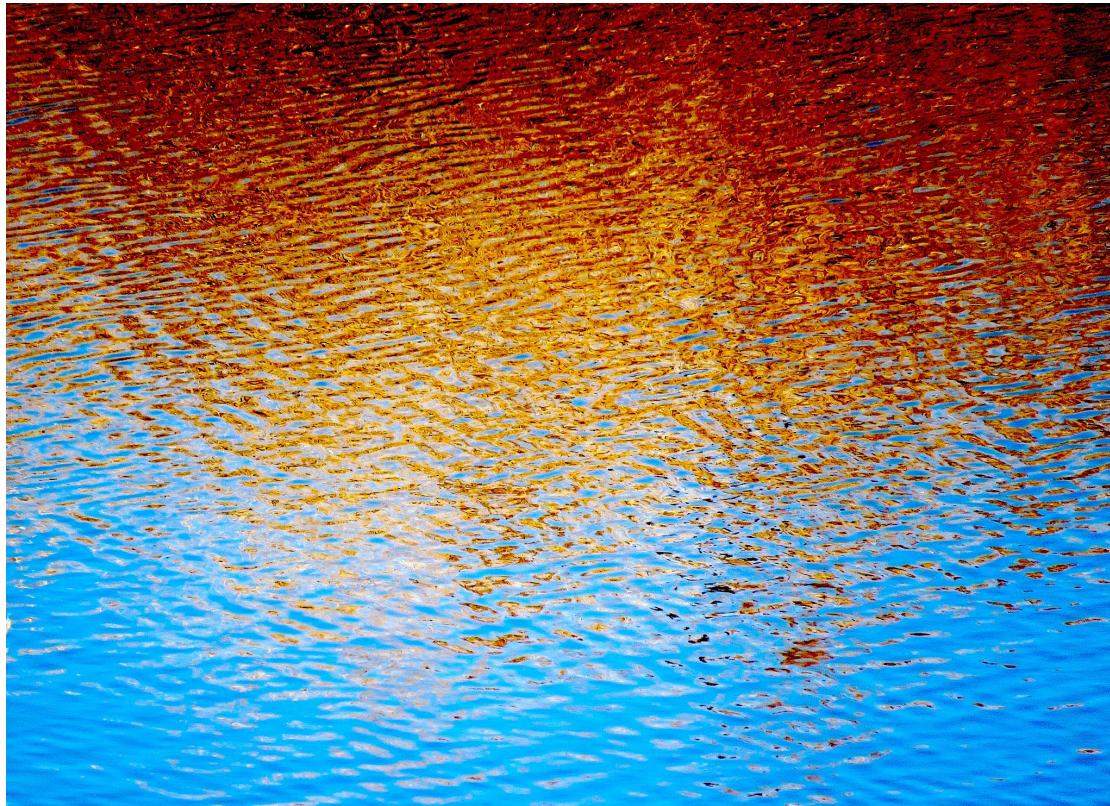


*高知県日高村・めだか池にて

光の弦は鳴り
心象の波はきらめき
いちめんの
いちめんの銀の花

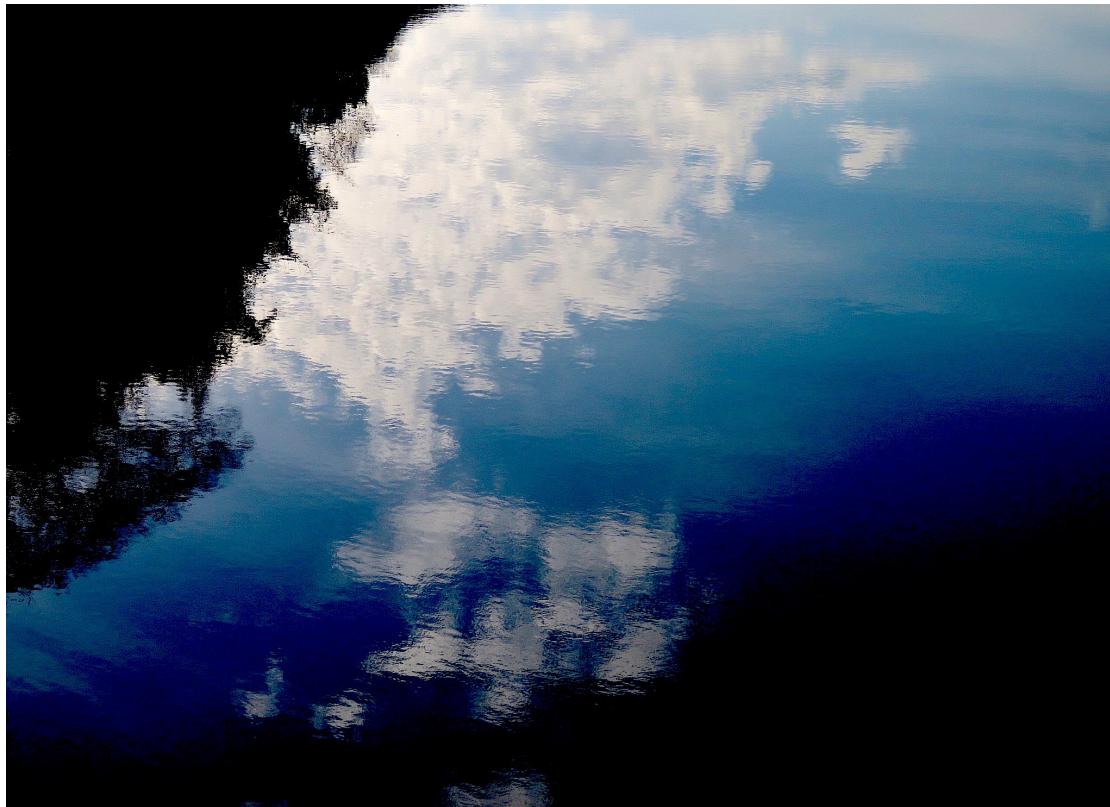
生まれたばかりの
星の言葉のように
はじめて聴いた
水の精の歌のように

光の弦は鳴り
銀の花はさざめき
いちめんの
いちめんの
光と水と風の織物です



*高知県南国市・物部川河口にて

わが心
如何せん
如何せんとて
たまきわる
いのちの赤く
燃ゆるごと
生きて尽くして
夢の果て
鏡に映るは
変わり映えせぬ
わが心の姿なり



ある日の自分に
会いにゆく
ドキドキ

雲はある日の雲のよう
水はある日の水のよう

ある日の自分が
会いにくる
ドキドキ

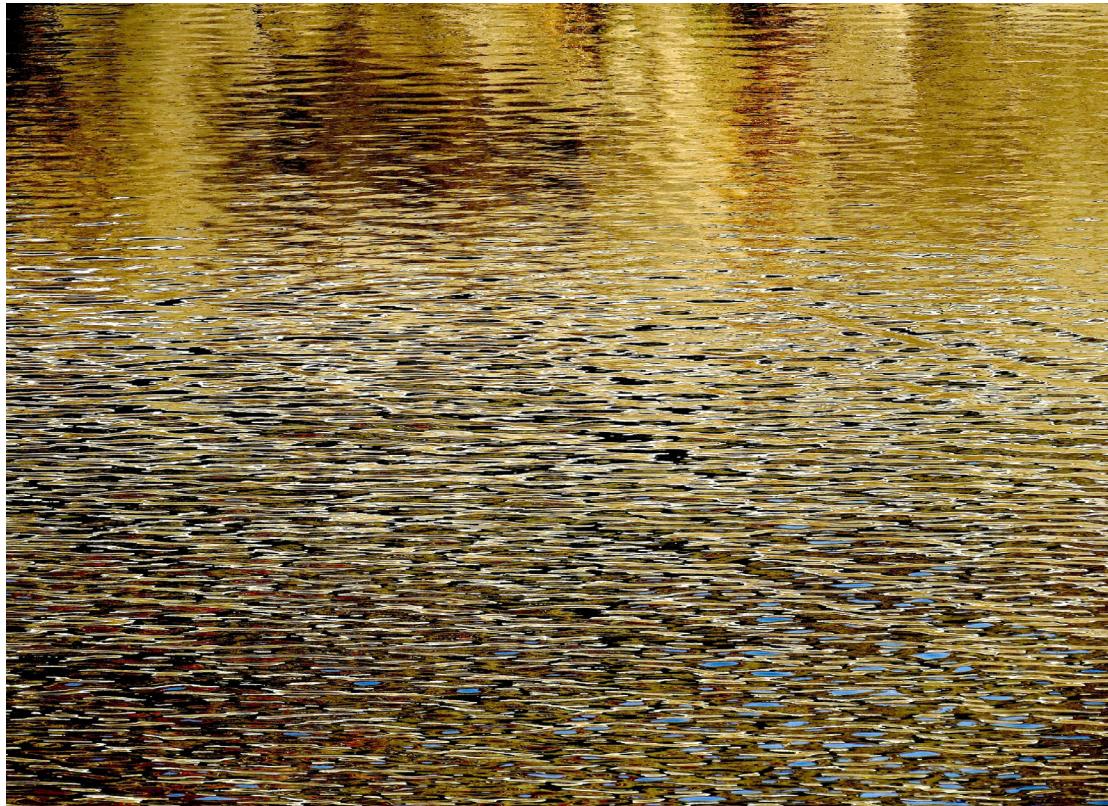
花はある日の花として
風はある日の風として

ある日の自分と
会いにゆく
ドキドキ

まだ見ぬ自分はどんなかな
知らない歌も聴けるかな



*高知県香北町・物部川上流にて



*高知県香北町・物部川上流にて

冬の光は輝けり

花なきゆえに

紅葉なきゆえに

冬の心は澄み渡る

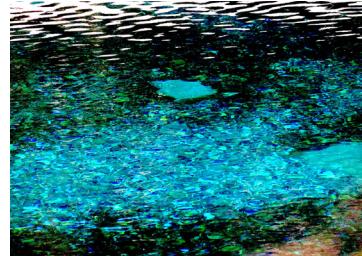
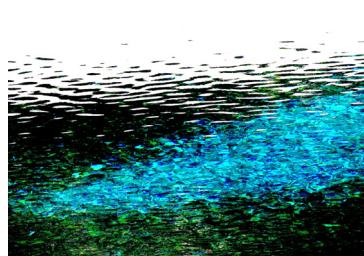
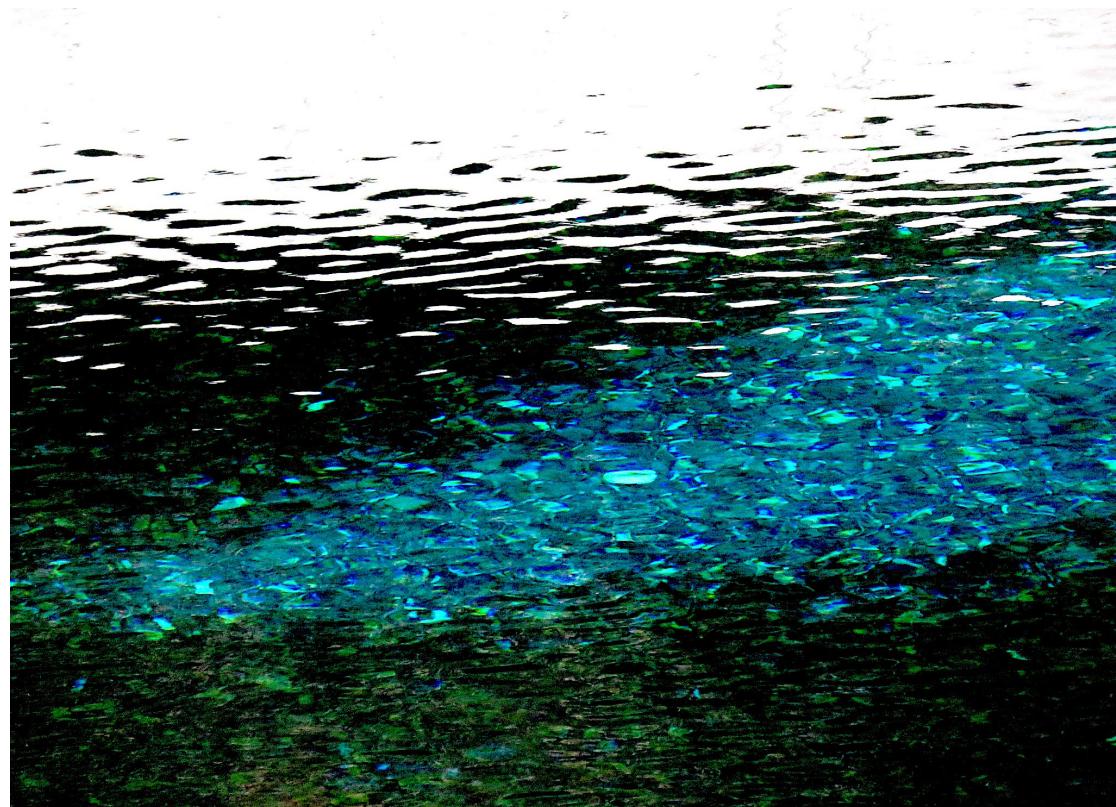
心貧しきゆえに

乞い求めるゆえに

冬の言葉は静まりぬ

耳の彼方に向かうがゆえに

我の深みに届くがゆえに



*高知県香北町・物部川上流にて

宝物はありますか
心のなかにそっと
しまっておきたい
宝物はありますか

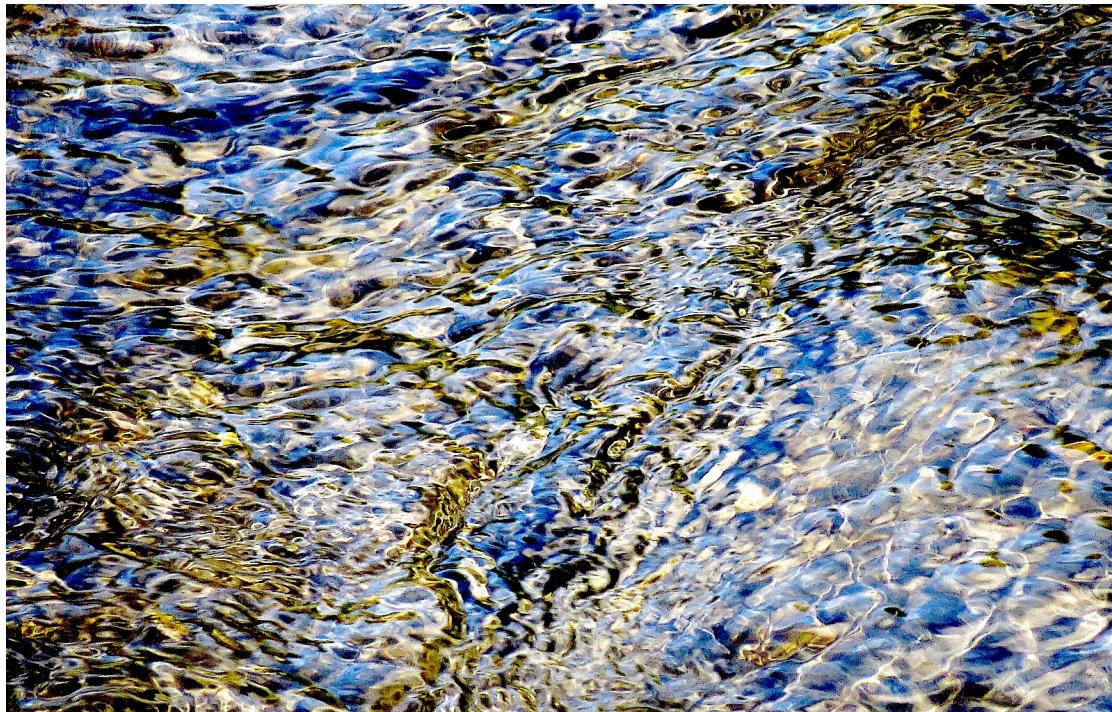
思い出はありますか
決して忘れたたくない
あなただけの大切な
思い出はありますか

忘れないことはありますか
決して思い出したたくない
あなたにとっては苦しみでしかない
忘れててしまいたいことはありますか

深い恐れはありますか
じぶんでも気づかないほどに
どこかで負ってしまった傷のような
深い恐れはありますか

できることならば
すべての悲しみと喜びを越えて
できることならば
すべてを宝物に変えて

風のようにはかないけれど
水のようになれるけれど
そんななかを静かに流れる
時の深みで



混沌のときは
混沌するのがよろしかろう
おのずから成るときまで

激しき欲のときは
激しく欲するのがよろしかろう
おのずからその流れの先に辿り着くとき
まで

悲しきときは
悲しむのがよろしかろう
おのずから解けだすときまで

恐れのときは
恐れるのがよろしかろう
おのずから源の見えるときまで

死するときは
死するのがよろしかろう
おのずから死の生に気づくときまで

*仁淀川町・仁淀川上流・久喜沈下橋にて



誰も知らない
秘密の淵で

未明の時の
その彼方

魂ふるわせ
湧きいづる

甘く切なく
懐かしい呼び声

誰も知らない
秘密の言葉は響くのだ



*仁淀川町・仁淀川上流・久喜沈下橋にて



黙しているのだ
巖となって
あらゆるいのちの極北で

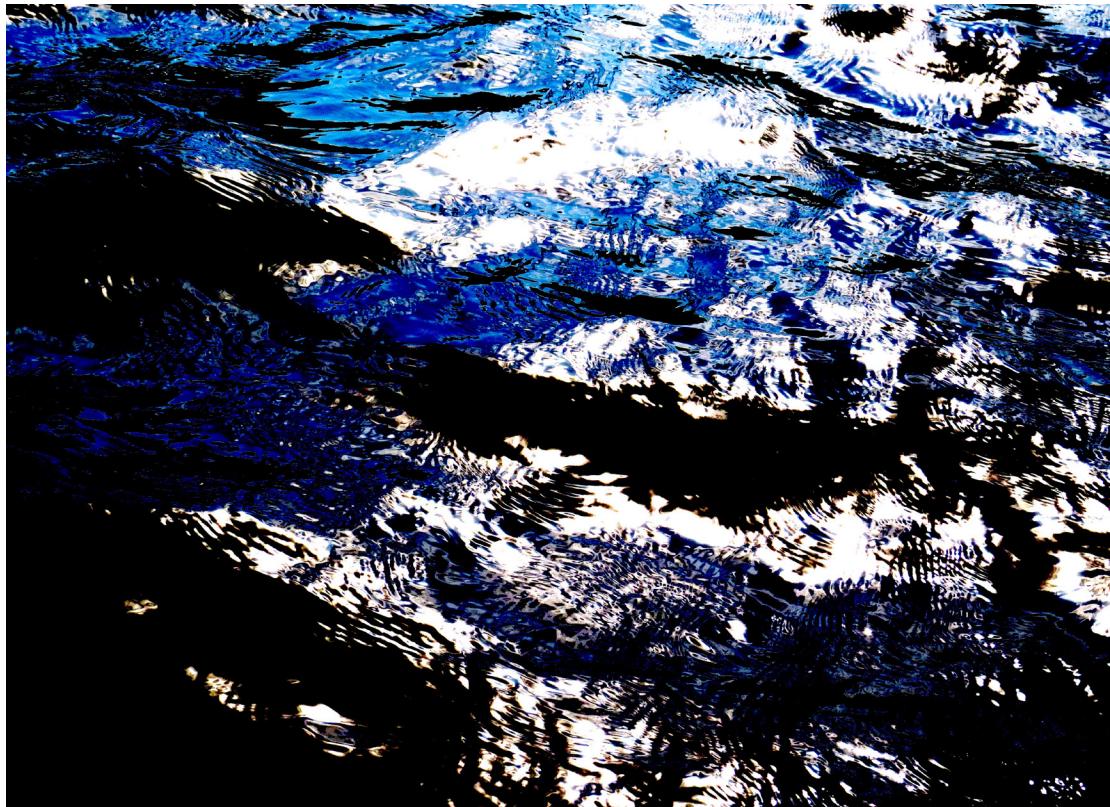
大地の詩は
神々のからだ

時を深めながら
静かに秘やかに詠う

祈っているのだ
巖となって
あらゆる言葉を超えて



*高知市・五台山にて



叫びたくなるのは
光がこんなに深く青いからだ

忘れることはできない
水はすべてを記憶する

痛いほどに悲しいのは
私がこんなに私の色をしているからだ

分けることはできない
主客の孤独は一幕の芝居にすぎない

切ないほどに懐かしいのは
天地のあいだを響き渡る風のせ이다

いまここを離れることはできない
彼方から永遠は降り注いでいる



*高知県日高村・めだか池にて



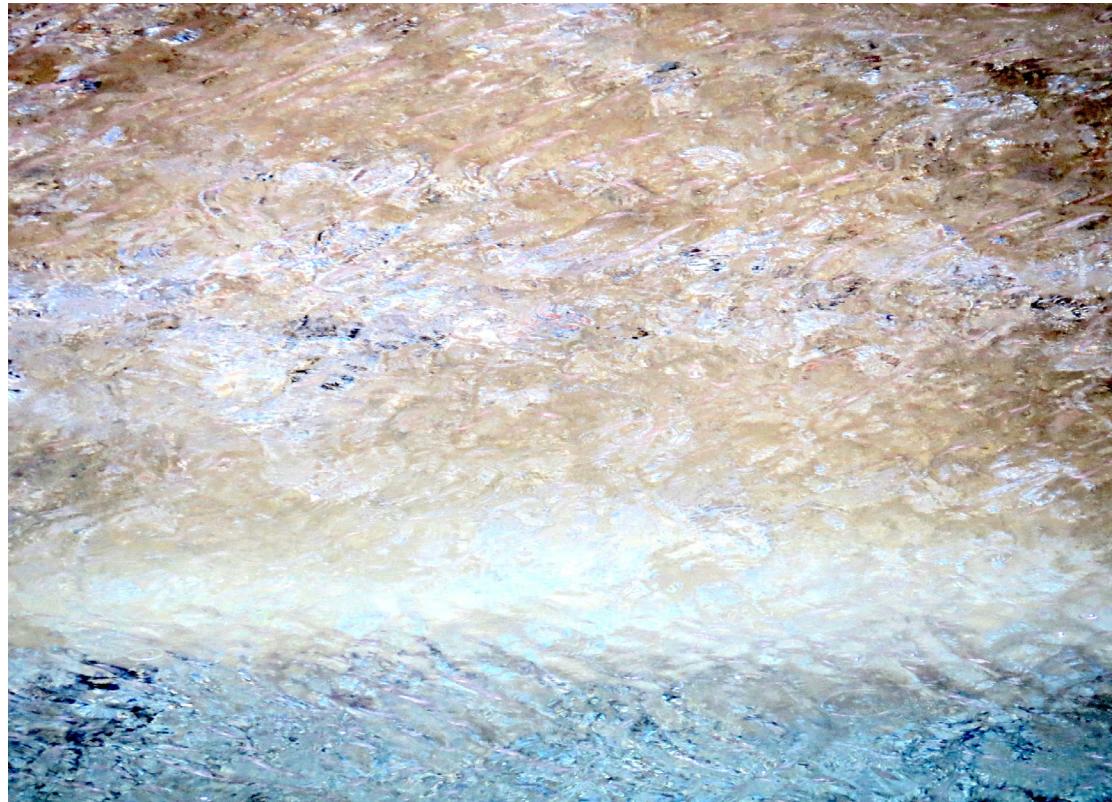
*高知県いの町・仁淀川上流にて

夢の境で
声を聞くか
水鏡の向こうから
ささやく声を聞くか

気をつけることだ
夢の境では己の斜が現れる
異形の姿が見えたとしても
それは鏡のなかの己なのだ

鏡のなかでは
与えるものが与えられる
その境を超えるとするならば
己を姿なきものに変えねばならない

気をつけることだ
鏡の向こうでは
後ろの正面で虚の己が
こちらを覗いているのだから



かつてそこに
それがあったことを知るものは
いまではだれもいないだろう

かつてそこに
描かれていた獣のこととも
いまではだれも知らない

かつてそこに
響いていた楽の音のこととも
いまではだれも知らない

ましてそこに
秘儀の神殿があったことなど
いまではだれにも知られない

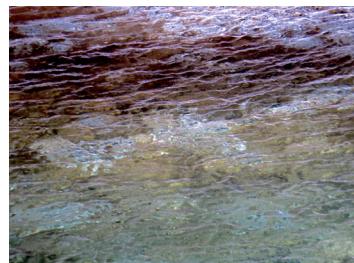
かつてそこに
私がいたのだということも
私さえ覚えていないくらいだ

それはまるで白昼夢のように
記憶の切れ端のように
私のなかに浮かんでくるにすぎない

ましてそこに
かけがえのない人がいたことなど
いまではだれも知るよしもないことだ

*高知県いの町・仁淀川上流にて

2017.1.28



*高知県いの町・仁淀川上流にて

こころの
ていきあつからびる
かんれいぜんせんが
わたしふきんを
つうかします

わたしという
げんじょうは
あめや
ゆきで
おおあれの
てんきとなるでしょう

そのご
はれまもみえますが
ごごには
にわかあめのところも
ありそうです

わたしという
げんじょうは
きまぐれで
なかなか
よそうができません

けれども
くものうえには
いつも
あおぞらと
ほしそらが
ひろがっているでしょう